

死をどのように考えてきたのか⑦

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

不殺生戒を否定する「宗教」があるとは思えませんが、たとえば、仏教には「捨身」（身を捨てて他の生物を救い、仏に供養する布施行の一つ）という考えもあって、自らのいのちを捧げる行為を布施行としています。さらに死にいたることのある断食という行と自殺（自死）や”殉教”ということで命を絶つというような行為をどうに考えていったらいいのでしょうか。

ダライ・ラマ 14 世は、一般的に、仏教の世界観と照らし合わせて、自殺は悪しき行いである。しかしながら、「自殺はすべて悪である」とは言い切れない。ある特定の、ひじょうに限定された状況において、自殺は許される行為となりうることを言うておかねばならない」（ダライ・ラマ『「死の謎」を説く』角川書店、平成 20 年、45 頁）と語りました。

自殺（自死）について

ダライ・ラマ 14 世は、次のようにも述べます。

自殺においては、己自身を殺すという動機は存在する。また、その行為は現実に遂行されている。だが、あなた自身が死ななければ自殺が完成しない以上、あなた自身が己を殺すという行為を完遂させることは不可能だ。真の意味で自殺は成立しないということになる。だが、やはり自殺は悪しき行ないであることに何かの変わりもないのだが。（同書、44 頁）

そして、「ある特定の、ひじょうに限定された状況」についてチベット僧の友人に言及しています。彼は 1960 年代に、中国当局に逮捕され、反革命の容疑で人民裁判が行われました。その結果、彼は公衆の面前で鞭打ちの刑が言い渡されました。ダライ・ラマ 14 世は、目的は「高僧へ恥辱を与えること」だったと言っています。そこで、かの僧がとった手段は、瞑想によって肉体から魂を切り離すことでした（瞑想による瞬時の死）。このような場合、こうした《死》を自ら選び取ることは許される（同書、46 頁）。それは「他者に悪しきカルマをもたらすことを避けるために、こうした自殺は許される」「瞑想による死もまた自殺である」と語っています。そうだとすれば、断食行も自殺と考えられます。つまり、どのような手段を用いたとしても、結果は死であること、自己の死であることになると言っているようです。自殺は絶対的に罪であるということはないにしろ、それは非常に特別な場合であることは再三強調されます。基本は「不殺生」にあり、「自殺ばかりではない。殺すことは、それが人間だけでなく、いかなる生命であろうとも殺生として禁じられている。生命の破壊は罪である」（同書、49 頁）のです。

わたし独りの存在しかないなら…「自殺」はない

自殺（自死と併用）について日本では、ここ 10 年以上も自殺者数が 3 万人を超えていたことが社会的な問題となっていました。最新のデータ（平成 25 年 3 月 7 日、警視庁）で 3 万人という数を下回ったこと（暫定値で 27,771 人）が報じられました。

自殺問題に対して仏教界の動きは鈍いと感じ、しかし、「いのちに対する揺るぎない理念をかかげ」、現実に向かっている僧侶の人たちが行動を起こしています。自死について実態調査を全所属寺に行ったある宗派は、その結果をもとに、自死にかかわって寺が直面する課題に応えるとともに、どうしたら

自死を止めることができるかを、実践から学ぶ取り組みをし、公開講座を開催しています。また、教団に附置された研究機関が共同でこの問題に取り組み、継続的に研究会を開いています。『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』には、試行錯誤を繰り返しながら、宗派を超えて困窮者に寄り添う僧侶たちが描かれました（磯村健太郎『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』岩波書店、2011 年）。

ところで、『意志と表象としての世界』（1819 年）で有名なショウペンハウエル（Arthur Schopenhauer）は『自殺について 他四篇』（斎藤信治訳、岩波書店、1979 年）を著しています。彼は、生の哲学、実存主義の先駆ともいわれる哲学者で、仏教およびインド哲学の影響を強く受けたとされます。その表紙には「人生とは裏切られた希望、挫折させられた目論見、それと気づいたときにはもう遅すぎる過ちの連続にほかならない、など透徹した洞察が易しく味わい深く描かれている」と書かれています。この世界や人間がそもそも存在すべきではないという確信は、実はわれわれが互いに寛容な気持ちで満たされるのに役立つ。なぜなら、そうした苦境にある人々から、何を期待することができるのかということになる。この視点はまさに世を苦とする立場に立つもので、「苦難を共にする人」という視点こそ、他人に正しい光を投げかけ、最も必要なことを思い出させるとしています。寛容、忍耐、思いやり、隣人愛が再提起されていると思われまます。仏教的に言い換えると、思い通りにならないから私たちは苦しむ、思い通りにならないことを苦にするよりも、思い通りにならないのが私たちの生存だという真実を受容することによって、苦からの解放も可能となりうるということでしょう。

つまり、哲学にとっても自殺は人生の課題として応答しなければならぬ哲学的課題であったのではないかということ。それは生きるために人生という存在をかけた悩みの現われの一つが自殺なのではないかということ。『どうせ死んでしまうのに、なぜいま死んではいけな

か？』の中で中島義道さんは、次のように述べています。

……青年たちは、悩んで悩んで悩み尽くした結果、ぼくのもとに来て、そして「生きること」の意味を問い、そして「なぜ、自殺してはいけな

いのか」と迫る。

答えは啞然とするくらいない。
……ぼくはただ沈黙して、きみが死なないことを祈るだけだ。なぜか。なぜなら、ぼくは悲しいから。そうだ、それだけなのかもしれない。それで十分ではないか。ぼくは悲しい。だから、死んではいけな

いのか。
……結局みんな死んでいくのだ。それなら、なぜいま死んではいけな